

芥川龍之介

俊
寬



俊

寬

俊寛しゅんかん云ひけるは……神明外しんめいになし。唯我等ただが一念なり。
……唯仏法を修行して、今度生死しょうしを出で給ふべし。

源平盛衰記げんぺいせいすいき

(俊寛) いとど思ひの深くなれば、かくぞ思ひつづけ
ける。「見せばやな我を思はぬ友もがな磯いそのとまやの柴しばの
庵いおりを」

同 上

一

俊寛様の話ですか？ 俊寛様の話位、世間に間違つて

伝えられた事は、まず外にはありません。いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、——有王自ありおう身の事さえ、飛とんでもない嘘うそが伝わっているのです。現に
ついこの間も、或琵琶法師びわほうしが語ったのを聞けば、俊寛様は御歎なげきの余り、岩に頭を打ちつけて、狂い死をなすつ

てしまふし、わたしはその御死骸おなきがらを肩に、身を投げて死んでしまつたなどと、云いつていゝるではありませんか？ 又もう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談かたらいをなすつた上、子供も大勢御出来になり、都にいらしつた時よりも、楽しい生涯しょうがいを御送りになつたとか、まことしやかに語つていました。前の琵琶法師の語つた事が、跡方もない嘘だと云う事は、この有王が生きていゝるので、おわかりになるかと思ひますが、後の琵琶法師の語つた事も、やはり好いい加減の出たらめなのです。

一体琵琶法師などと云うものは、どれもこれも我は顔に、嘘ばかりついているものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはいられません。わたしはあの笹葺ささぶきの小屋に、俊寛様が子供たちと、御戯おたわむれになる所を聞けば、思わず微笑を浮べましたし、又あの浪音なみおとの高い月夜に、狂い死をなさる所を聞けば、つい涙さえ落しました。たとい嘘とは云うものの、ああ云う琵琶法師の語った嘘は、きっと琥珀こはくの中の虫のように、末代までも伝わるでしょう。して見ればそう云う嘘があるだけ、わたしでも今の内ありのままに、俊寛様の事を御話しな

いと、琵琶法師の嘘は何時いつの間にか、ほんとうに変わってしまうかも知れない——と、こうあなたは仰有おっしゃるのですか？ 成程それも御尤もつともです。では丁度夜長を幸い、わたしがはるばる鬼界きかいが島しまへ、俊寛様を御尋ね申した、その時の事を御話しましょう。しかしわたしは琵琶法師のように、上手にはとても話されません。唯わたしの話の取り柄えは、この有王が目まのあたりに見た、飾りのない真実と云う事だけです。ではどうか少時しばらくの間、御退屈でも御聞き下さい。

二

わたしが鬼界が島に渡ったのは、治承三年五月の末、
或曇った午過ぎひるです。これは琵琶法師も語る事ですが、
その日もかれこれ暮れかけた時分、わたしはやつと俊寛
様に、めぐり遇あう事が出来ました。しかもその場所は人
気のない海べ、——唯灰色の浪ばかりが、砂の上に寄せ
ては倒れる、如何いかにも寂しい海べだったのです。

俊寛様のその時の御姿は、——そうです。世間に伝わ

っているのは、「童わらわかとすれば年老かおいてその貌かおにあら
ず、法師かと思えば又髪は空そらさまに生おい上あがりて白髪多し。
よろずの塵ちりや藻屑もくずのつきたれども打ち払わず。頸くび細くし
て腹大きに脹はれ、色黒うして足手細し。人にして人に非
ず」と云うのですが、これも大抵は作り事です。殊ことに頸
が細かったの、腹が脹はれていたのと云うのは、地獄變の画え
からでも思いついたのでしよう。つまり鬼界が島と云う
所から、餓鬼の形容を使ったのです。成程その時の俊寛
様は、髪も延びて御出でになれば、色も日に焼けていら
っしやいました。その外は昔に変わらない、——いや、

変らないどころではありません。昔よりも一層丈夫そう
 な、頼もしい御姿おすがただったので。それが静かな潮風に、
 法衣ころもの裾すそを吹かせながら、浪打際なみうちぎわを独りひと御出おいでになる、
 — 見れば御手おてには何と云うのか、笹の枝に貫いた、小
 さい魚を下げていらっしやいました。

「僧都そうずの御房ごぼう！ よく御無事でいらっしやいました。わ
 たしです！ 有王です！」

わたしは思わず駈かけ寄りながら、嬉うれしまぎれにこう叫
 びました。

「おお、有王か！」

俊寛様は驚いたように、わたしの顔を御覧になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝ひざを抱いたまま、嬉し泣きに泣いていたのです。

「よく来たな。有王！ おれはもう今生こんじょうでは、お前にも会えぬと思っていた」

俊寛様も少時しばらくの間は、涙ぐんでいらっしやるようでしたが、やがてわたしを御抱き起しになると、「泣くな。泣くな。せめては今日会っただけでも、仏菩薩ぶつぼさつの御慈悲と思うが好い」と、親のように慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房は、——御房の御お住居すまいは、この界限かいわいでございますか？」

「住居か？ 住居はあの山の陰じゃ。」

俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山いそやまを御指しになりました。

「住居と云つても、檜肌茸ひわだぶきではないぞ」

「はい、それは承知しております。何しろこんな離れ島でございますから、——」

わたしはそう云いかけたなり、又涙に咽むせびそうにしました。すると御主人は昔のように、優しい微笑を御見せ

になりながら、

「しかし居心は悪くない住居じゃ。寝所ねどころもお前には不自由はさせぬ。では一しよに来て見るが好い」と、気軽
に案内をして下さいました。

少時しばらくの後のちわたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、
寂しい漁村はいました。薄白い路みちの左右には、梢こずえか
ら垂れた榕樹あこうの枝に、肉の厚い葉が光っている、——そ
の木の間点々と、笹葺きの屋根を並べたのが、この島
の土人の家なのです。が、そう云う家の中に、赤赤と竈かまど
の火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、とに

かく村里へ来たと言う、懐なつかしい気もちだけはして来ました。

御主人は時時振り返りながら、この家にいるのは琉りゅう球きゅう人だとか、あの檻おりには豕いのこが飼つてあるとか、いろいろ教えて下さいました。しかしそれよりも嬉しかったのは、烏帽子えぼしさえかぶらない土人の男女が、俊寛様の御姿を見ると、必ず頭かならを下げた事です。殊に一度なぞは或家の前に、鶏とりを追っていた女の児さえ、御時宜じぎをしたではありませんか？ わたしは勿論もちろん嬉しいと同時に、不思議にも思ったものですから、何か訳のある事かと、そつ

と御主人に伺って見ました。

「成経様なりつねや康頼様やすよりが、御話しなごしになつたところでは、この島しまの土人も鬼のように、情なさけを知らぬ事かと存じましたが、——」

「成程、都みやこにいるものには、そう思われるに相違あるまい。が、流人るにんとは云うものの、おれたちは皆都人みやこびとじゃ。

辺土へんちの民は何時いっの世にも、都人と見れば頭かぶを下げる。業平なりひらの朝臣あそん、実方さねかたの朝臣、——皆大同小異あづまではないか？ あ

あ云う都人もおれのようあづまに、東あづまや陸奥みちのくへ下くだつた事は、思おもいの外ほか楽しい旅たびだつたかかも知れぬ」

「しかし実方の朝臣などは、御隠れになった後のちでさえ、都恋しさの一念から、台盤だいばんどころ所の雀になつたと、云い伝えておるではありませんか？」

「そう云う噂うわさを立てたものは、お前と同じ都人じゃ。鬼界が島の土人と云えば、鬼のように思う都人じゃ。して見ればこれも当てにはならぬ」

その時又一人御主人に、頭を下げた女がいました。これは丁度榕樹あこうの陰に、幼な児を抱かかいていたのですが、その葉はに後を遮かざられたせいか、紅染べにぞめの単衣ひとえを着た姿が、夕明りに浮んで見えたものです。すると御主人はこの女

に、優しい会釈を返されてから、

「あれが少将の北の方じゃぞ」と、小声に教えて下さいました。

わたしはさすがに驚きました。

「北の方と申しますと、——成経様はあの女と、夫婦になっ
ていらしったのですか？」

俊寛様は薄笑いと一しよに、ちよいとうなず頷いて御見せ
になりました。

「抱いていた児も少将の胤たねじゃよ」

「成程、そう伺って見れば、こう云う辺土にも似合わ

ない、美しい顔をしておりました」

「何、美しい顔をしていた？　美しい顔とはどう云う顔じゃ？」

「まあ、眼の細い、頬ほおのふくらんだ、鼻の余り高くない、おっとりした顔かと思いますが、——」

「それもやはり都の好みじゃ。この島ではまず眼の大きい、頬どこの何処かほっそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顔が尊まれる。そのためにも今の女なぞも、此処ここでは誰も美しいとは云わぬ」

わたしは思わず笑い出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云う事を知らない
 のですね。そうするとこの島の土人たちは、都の上臈じょうろう
 を見せてやっても、皆醜いと笑いますかしら？」

「いや、美しいと云う事は、この島の土人も知らぬでは
 ない。唯好みが違っているのじゃ。しかし好みと云うも
 のも、万代不変ばんだいふへんとは請合われぬ。その証拠には御寺御寺
 の、御仏みほとけの御姿みすがたを拜むが好い。三界六道さんがいりくどうの教主、十方じつぽう
 最勝さいしょう、光明無量こうみやうむりよう、二学無碍にがくむげ、億億衆生おくおくしゆじよういんどう引導いんどうの能化のうげ、
 南無大慈大悲なむだいいじだいひしや釈迦牟尼しやくかむに如来にによらいも、三十二相八十種好の御姿おすがた
 は、時代毎にいろいろ御変りになった。御仏でももしそ

うとすれば、如何いかんかこれ美人と云う事も、時代毎にやはり違はずう筈はずじゃ。都でもこの後のち五百年か、或は又一千年か、とにかくその好みの変る時には、この島の土人の女どころか、南蛮なんばん北狄ほくてきの女のように、凄すさまじい顔がはやるかも知れぬ」

「まさかそんな事もありますまい。我国ぶりは何時いつの世にも、我国ぶりでいる筈ですから」

「ところがその我国ぶりも、時と場合では当てにならぬ。たとえば当世の上臈の顔は、唐朝の御仏いぎぶつに活写いぎぶつしじや。これは都人の顔の好みが、唐土もろこしになずんでいる証拠

ではないか？　すると人皇何代かの後には、碧眼の胡人へきがん えびすの女の顔にも、うつつをぬかす時がないとは云われぬ」

わたしは自然とほほ笑みました。御主人は以前もこう云う風に、わたしたちへ御教訓なすったのです。「変らぬのは御姿ばかりではない。御心もやはり昔のままだ」

——そう思うと何だかわたしの耳には、遠い都の鐘の声も、通かよって来るような気がしました。が、御主人は榕樹の陰に、ゆっくり御み足を運びながら、こんな事もまた仰おっしや有るのです。

「有王。おれはこの島に渡って以来、何が嬉しかったか

知っているか？　それはあのやかましい女房のやつに、
毎日小言を云われずとも、暮されるようになった事じや
よ」

三

その夜^よわたしは結い燈台の光に、御主人の御飯を頂き
ました。本来ならばそんな事は、恐れ多い次第なのです
が、御主人の仰せもありましたし、御給仕にはこの頃御
召使いの、兎唇の童^{わらべ}も居りましたから、御招伴に預つ

た訳なのです。

御部屋は竹縁をめぐらせた、僧庵そうあんとも云いたい拵こしらえです。縁先に垂れた簾すだれの外には、前栽せんざいの竹たかむらがあるのですが、椿つばきの油を燃やした光も、さすがに其処までは届きません。御部屋の中には皮籠かわごばかりか、廚子ずしもあれば机もある、——皮籠は都を御立ちの時から、御持ちになつていたのですが、廚子や机はこの島の土人が、不ふ束つつかながらも御拵え申した、琉球赤木とかの細工だそうです。その廚子の上には経文と一しよに、阿弥陀如来あみだによらいの尊像が一体、端然と金色こんじきに輝いていました。これは確か

康頼様の、都返りの御形見おかたみだとか、伺ったように思っています。

俊寛様は円座わろうだの上に、楽楽と御坐りなすったまま、いろいろ御馳走ちそうを下さいました。勿論この島の事ですから、酢すや醬油しょうゆは都程、味が好いとは思われません。が、その御馳走の珍しい事は、汁、鱈なます、煮つけ、果物、——名さえ確かに知っているのは、殆ほとんど一つもなかつた位です。御主人はわたしが呆あきれたように、箸はしもつけないのを御覧になると、上機嫌じょうきげんに御笑いなさりながら、こう御勧め下さいました。

「どうじゃ、その汁の味は？　それはこの島の名産の、
 臭梧桐くさぎりと云う物じゃぞ。こちらの魚うおも食うて見るが好い。
 これも名産の永良部えらぶ鰻うなぎじゃ。あの皿にある白地鳥しろちどり、
 ——そうそう、あの焼き肉じゃ。——それも都などでは
 見た事もあるまい。白地鳥と云う物は、背の青い、腹の
 白い、形は鶴こうにそっくりの鳥じゃ。この島の土人はあの
 肉を食うと、湿気を払うとか称となえている。その芋も存外
 味は好いぞ。名前か？　名前は琉球芋じゃ。梶王かじおうなどは
 飯の代りに、毎日その芋を食うている」

梶王と云うのはさつき申した、兎唇の童の名前なので

す。

「どれでも勝手に箸をつけてくれい。粥かゆばかり啜すすつてい
 さえすれば、得脱とくだつするようには考かんえるのは、沙門しゃもんにあり勝
 ちの不量見ふりやうけんじゃ。世尊せそんさえ成道じやうどうされる時には、牧牛の
 女むすめ難陀婆羅なんだばらの乳糜にゅうびの供養を受けられたではないか？
 もしあの時空腹のまま、畢波羅樹下ひつぱらじゆかに坐まつていられたら、
 第六天の魔王波旬はじゆんは、三人の魔女なぞを遣つかすよりも、
 六牙象王の味噌漬みそづけだの、天竜八部の粕漬かすづけだの、天竺
 の珍味を降くだらせたかも知らぬ。尤も食足くいれば淫いんを思おもうの
 は、我我凡夫の慣ないじやから、乳糜を食たわれた世尊の前

へ、三人の魔女を送ったのは、波旬も天あつ晴見ぱr上げた才子じゃ。が、魔王の浅ましきには、その乳糜を献じたものが、女人によにんじゃと云う事を忘れておった。牧牛の女難むすめ陀婆羅、世尊に乳糜を献じ奉る、——世尊が無上の道へ入られるには、雪山せつざん六年の苦行よりも、これが遥はるかに大事だったのじゃ。『取彼乳糜如意かのにゆうびをとりのごとくほうしよくし飽食、悉皆浄尽しっかいじようじんす』——ぶつほんぎようきよう仏本行經七卷の中にも、あれほど難有ありがたい所は沢山あるまい。——そのとき爾時菩薩食 糜已訖あん從座而起。安あん庠じようぜんぜんぼだいじゆにむかう漸々向菩提樹』どうじゃ。『安庠あんじようぜんぜんぼだいじゆにむかう漸々向菩提樹』女人を見、乳糜に飽かれた、端嚴たんごん微妙みみようの世尊の御姿が、

目まのあたりに拝まれるようではないか？」

俊寛様は楽しそうに、晩の御飯をおしまいになると、今度は涼しい竹縁の近くへ、円座を御移しになりながら、「では空腹が直ったら、都の便りでも聞かせて貰もらおう」とわたしの話を御促しになりました。

わたしは思わず眼を伏せました。兼ねて覚悟はしていたものの、いざ申し上げるとなると、今更のようおくに心が怯れたのです。しかし御主人は無頓着むとんじゃくに、芭蕉ばしやうの葉の扇おうぎを御手にしたまま、もう一度御催促なさいました。

「どうじゃ、女房は相あい不かわ変らず小言ばかり云っているか？」
わたしはやむを得うず俯つ向むいたなり、御留守の間に出し来ゆした、いろいろの大変を御話しました。御主人が御捕とわれなすった後のち、御近ご習きんじゆは皆逃げ去った事、京極きやうごくの御屋形おやかたや鹿ししヶ谷たにの御山荘も、平家の侍に奪われた事、北の方は去年の冬、御隠れになつてしまつた事、若君も重もい庖瘡がさの為に、その跡を御追いなすつた事、今ではあなたの御家族の中でも、たつた一人姫君だけが、奈良の伯母おば御前ごぜの御住居に、人目を忍んでいらつしやる事、——そう云う御話をしている内に、わたしの眼には何時の間にか、

燈台の火影ほかげが曇ほって来ました。軒先の簾すだれ、廚子の上の御仏、——それももうどうしたかわかりません。わたしはどうとう御話半ばに、その場へ泣き沈しんでしまいました。御主人は始終もくねん黙然と、御耳を傾けていらしたようです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配そうに、法衣ころもの膝を御寄せになりました。

「姫はどうじゃ？　伯母御前にはようなついているか？」

「はい。御睦むつましいように存ぞんじました」
わたしは泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息をさし上げ

ました。それはこの島へ渡るものには、門司もじや赤間あかまが関せきを船出する時、やかましい詮議せんぎがあるそうですから、髻もとどりに隠して来た御文ふみなのです。御主人は早速燈台の光に、御消息をおひろげなさりながら、所所小声に御読みにになりました。

「……世の中かきくらしして晴るる心地なく侍りはべ、……さても三人みたり一つ島に流されけるに、……などや御身一人残り止まり給うらんと、……都には草のゆかりも枯れはてて、……当時は奈良の伯母御前ごぜの御許おんもとに侍り。……おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居推し量

り給へ。……さてもこの三とせまで、如何御心強く、有
 とも無とも承はらざるらん。……とくとく御上り候へ。
 恋しとも恋し。ゆかしともゆかし。……あなかしこ、あ
 なかしこ……」

俊寛様は御文を御置きになると、じつと腕組みをなす
 ったまま、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二になった筈じやな。——おれも都には未
 練はないが、姫にだけは一日会いたい」

わたしは御心中を思いやりながら、唯涙ばかり拭って
 いました。

「しかし会えぬものならば、——泣くな。有王。いや、泣きたければ泣いても好い。しかしこの娑婆しゃば世界には、一一泣いては泣き尽せぬ程、悲しい事が沢山あるぞ」
御主人は後の黒木くろきの柱に、ゆっくり背中を御寄せになつてから、寂しそうに御微笑なさいました。

「女房も死ぬ。若も死ぬ。姫には一生会えぬかも知れぬ。屋形や山荘もおれの物ではない。おれは独ひとり離れ島に老の来るのを待っている。——これがおれの今のさまじゃ。が、この苦艱くげんを受けているのは、何もおれ一人に限った事ではない。おれ一人衆苦の大海に、没在してい

ると考えるのは、ふつでし 仏弟子にも似合わぬぞうじようまん 增長慢じや。

『ぞうじようきようまん 增長驕慢、なかせぞくびやくえのよろしきところにあらず 尚非世俗 白衣所宜』かんなん 艱難の多い

のに誇る心も、やはりじやごう 邪業には違いあるまい。その心さえ除いてしまえば、このぞくさんへんど 粟散辺土の中にも、おれ程の苦を受けているものは、ごうがしや 恒河沙の数より多いかも知れぬ。

いや、にんがい 人界に生れ出たものは、たといこの島に流されず

とも、皆おれと同じように、たん 孤独の歎を洩もらしているの

じや。むらかみ 村上の御門第七の王子、にほんなかつかさしんのう 二品中務親王六代のこういん 後胤、

にんなじ 仁和寺の法印寛雅が子、京極のみなもとのだい 源大納言雅俊卿の孫

に生れたのは、こう云う俊寛一人じやが、あめ 天が下には千

の俊寛、万の俊寛、十万の俊寛、百億の俊寛が流されて
いるぞ。――」

俊寛様はこう仰有ると、おっしや 忽ち又御眼おんめの何処かに、陽
気な御気色みけしきが閃ひらめきました。

「一条二条の大路の辻に、盲人が一人さまようているの
は、世にも憐れあわに見えるかも知れぬ。が、広い洛中洛
外、無量無数の盲人どもに、充みち満ちた所を、眺ながめたら、
有王。お前はとうすると思う？ おれならばまっ先にふ
き出してしまふぞ。おれの島流しも同じ事じゃ。十方じっぽうに
遍満した俊寛どもが、皆唯一人流されたように、泣きつ喚わめ

きつしていると思えば、涙の中うちにも笑わずにはいられぬ。
 有王。三界一心さんがいいっしんと知った上は、何よりもまず笑う事を学
 べ。笑う事を学ぶ為には、まず増長慢を捨てねばならぬ。
 世尊の御出世ごしゅつせいは我々衆生しゅじょうに、笑う事を教えに来られた
 のじゃ。大般涅槃だいはつねはんの御時おんときにさえ、摩訶伽葉まかかしょうは笑ったで
 はないか？」

その時はわたしもいつのまにか、頬の上に涙が乾いて
 いました。すると御主人は簾越しに、遠い星空を御覧に
 なりながら、

「お前が都へ帰ったら、姫にも歎きをするよりは、笑う

事を学べと云つてくれい」と、何事もないように仰有るのです。

「わたしは都へは帰りません」

もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで来ました。今度はそう云う御言葉を、御恨みに思った涙なのです。

「わたしは都にいた時の通り、御側勤めをするつもりです。年とつた一人の母さえ捨て、兄弟にも仔細しさいは話さずに、はるばるこの島へ渡つて来たのは、その為ばかりではありませんか？ わたしはそう仰有られる程命おしが惜い

ように見えるでしょうか？ わたしはそれ程恩義を知らぬ、人非人にんびにんのように見えるでしょうか？ わたしはそれ程、——」

「それ程愚かとは思わなかった。」

御主人は又前のように、にここにこ御笑いになりました。

「お前がこの島に止とどまっていれば、姫の安否を知らせるのは、誰が外に勤めるのじゃ？ おれは一人でも不自由はせぬ。まして梶王と云う童がいる。——と云ってもまさか妬ねたみなぞはすまいな？ あれは便りのないみなし児じゃ。幼い島流しの俊寛じゃ。お前は便船のあり次第、

早速都へ帰るが好い。その代り今夜は姫への土産みやげに、おれの島住いがどんなだったか、それをお前に話して聞かそう。又お前は泣いているな？ よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話を書いてくれい。おれは独り笑いながら、勝手に話を続けるだけじゃ」

俊寛様は悠悠ゆうゆうと、芭蕉扇ばしやうせんを御使いなさりながら、島住居の御話をなさり始めました。軒先に垂れた簾の上には、ともし火の光を尋ねて来たのでしよう、かすかに虫の這はう音が聞えています。わたしは頭を垂れたまま、じっと御話に伺い入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承元年七月の始
じや。おれは一度も成親なりちかの卿きようと、天下なぞを計った覚
えはない。それが西八条へ籠こめられた後のち、いきなり、こ
の島へ流されたのじやから、始はおれも忌忌しさの余り、
飯を食う気さえ起らなかつた」

「しかし都の噂では、——」
わたしは御言葉を遮さへぎりました。

「僧都の御房も宗人むねとの一人に、おなりになつたとか云う事ですが、——」

「それはそう思うに違いない。成親の卿さえ宗人の一人に、おれを数えていたそうじゃから、——しかしおれは宗人ではない。浄海入道の天下が好いか、成親の卿の天下が好いか、それさえおれにはわからぬ程じゃ。事によると成親の卿は、浄海入道よりひがんでいるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれは唯平家の天下は、ないに若しかぬと云つただけじゃ。源平藤橘げんぺいとうきつ、どの天下も結局あるのはないに若しかぬ。この島の土人を見るが好い。

平家の代でも源氏の代でも、同じように芋を食うては、同じように子を生んでいる。天下の役人は役人がいぬと、天下も亡ぶように思っているが、それは役人のうぬ惚れぼだけじゃ」

「が僧都の御房の天下になれば、何御不足にもありませんまい」

俊寛様の御眼おめの中には、わたしの微笑が映ったように、やはり御微笑が浮びました。

「成親の卿の天下同様、平家の天下より悪いかも知れぬ。何故と云えば俊寛は、浄海入道より物わかりが好い。

物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではないか？ 理非曲直も弁わきまえずに、途方もない夢ばかり見続けている、——其処が高平太たかへいの強い所じや。小松の内府なぞは利巧なだけに、天下を料理するとなれば、浄海入道より数段下じや。内府も始終病身じやと云うが、平家一門の為を計れば、一日も早く死んだが好い。その上又おれにしても、食色じきしきの二性を離れぬ事は、浄海入道と似たようなものじや。そう云う凡夫ぼんぷの取った天下は、やはり衆生の為にはならぬ。所詮しよせん人界にんがいが浄土になるには、御み仏ほとけの御おん天下てんかを待つ外はあるまい。——おれはそう思

つていたから、天下を計る心なぞは、微塵みじんも貯えてはいなかつた」

「しかしあの頃は毎夜のように、中御門高倉なかみかどたかくらの大納言様だいなごんさまへ、御通いなすつたではありませんか？」

わたしは御不用意を責めるように、俊寛様の御顔を眺めました、ほんとうに当時の御主人は、北の方の御心配も御存知ないのか、夜は京極の御屋形にも、滅多めったに御休みではなかつたのです。しかし御主人は不相変あいかわらず、澄ました御顔をなすつたまま、芭蕉扇を使つていらつしやいました。

「其処が凡夫の浅ましきじや。丁度あの頃あの屋形には、鶴の前と云う上童うえわらわがあつた。これが如何なる天魔の化身けしんか、おれを捉えて離さぬのじや。おれの一生の不仕合わせは、皆あの女がいたばかりに、降つて湧わいたと云うても好い。女房に横面よこつらを打たれたのも、鹿ヶ谷ししの山莊たにを仮かしたのも、しまいにこの島へ流されたのも、——しかし有王、喜んでくれい。おれは鶴の前に夢中になつても、謀叛むほんの宗人にはならなかつた。女人にょにんに愛樂を生じたためしは、古今の聖者にも稀まれではない。大幻術の摩登まとう伽女ぎやには、阿難尊者あなんそんじやさえ迷わせられた。竜樹菩薩りゆうじゆぼさつも在

俗の時には、王宮の美人を偷ぬすむ為に、隱形おんぎようの術を修せられたそうじや。しかし謀叛人になつた聖者は、天竺震旦てんじくしんたん本朝を問わず、唯の一人もあつた事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議はない。女人に愛樂を生ずるのは、五根ごこんの欲を放つだけの事じや。が、謀叛を企てるには、貪嗔癡どんしんちの三毒を具そなえねばならぬ。聖者は五欲を放たれても、三毒の害は受けられぬのじや。して見ればおれの智慧ちえの光も、五欲の為に曇つたと云え、消えはしなかつたと云わねばなるまい。——が、それはともかくも、おれはこの島へ渡つた当座、毎日忌忌しい思いをしていた」

「それはさぞかし御難儀だったでしょう。御食事は勿論、御召し物さえ、御不自由勝ちに違いありませんから」

「いや、衣食は春秋二度ずつ、肥前の国鹿瀬かせの荘しょうから、少将のもとへ送って来た。鹿瀬の荘は少将の舅しゅうと、平の教盛のりもりの所領の地じゃ。その上おれは一年程たつと、この島の風土にも慣れてしまった。が、忌忌たんばしさを忘れるには、一しよに流された相手が悪い。丹波たんばの少将成経などは、ふさいでいなければ居睡りをしていた」

「成経様は御年若でもあり、父君の御不運を御思いになつては、御歎なげきなさるのも御尤ごもつともです」

「何、少将はおれと同様、天下はどうなってもかまわぬ男じや。あの男は琵琶でも掻き鳴らしたり、桜の花でも眺めたり、上臈じょうろうに恋歌れんかでもつけていれば、それが極樂じやと思われている。じやからおれに会いさえすれば、謀叛人の父ばかり怨うらんでいた」

「しかし康頼様は僧都の御房と、御親しいように伺いましたか」

「ところがこれが難物なのじや。康頼は何でも願さえかければ、天神地神諸仏菩薩しんぶつ、悉しつあの男の云うなり次第に、利益りやくを垂れると思われている。つまり康頼の考え

では、神仏も商人と同じなのじゃ。唯神仏は商人のよう
 に、金銭では冥護みょうごを御売りにならぬ。じゃから祭文さいもんを
 読む。香火を供える。この後の山なぞには、姿の好い松
 が沢山あつたが、皆康頼に伐きられてしもうた。伐って何
 にするかと思えば、千本の卒塔婆そとばを拵こしらえた上、一一そ
 れに歌を書いては、海の中へ抛ほうりこむのじゃ。おれはま
 だ康頼位、現金な男は見た事がない」
 「それでも莫迦ぼかにはなりません。都の噂ではその卒塔婆
 が、熊野にも一本、巖島いづくしまにも一本、流れ寄ったとか申
 していました」

「千本の中には一本や二本、日本の土地へも着きそうなものじゃ。ほんとうに冥護を信ずるならば、たった一本流すが好い。その上康頼は難有ありがたそうに、千本の卒塔婆を流す時でも、始終風向きを考えていたぞ。何時かおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、帰命きみようちょうらいくまの頂礼熊野三所の権現ごんげん、分けては日吉山王ひよしさんのう、王子の眷属けんぞく、総じては上かみは梵天帝釈ぼんてんたいしゃく、下は堅牢地神しもけんろう、殊には内海外海げかい竜神八部、応護まなじりの毗まなじりを垂れさせ給えと唱えたから、その跡へ並びに西風大明神にししかぜ、黒潮権現も守らせ給え、謹上再拝とつけてやった」

「悪い御冗談をなさいます」

わたしもさすがに笑い出しました。

「すると康頼は怒ったぞ。ああ云う大嗔恚だいしんいを起すようでは、現世利益げんぜりやくはともかくも、後生往生ごしょうおうじょうは覚束おぼつかないものじゃ。——が、その内に困まった事には、少将もいつか康頼と一しよに、神信心を始めたではないか？ それも熊野とか王子とか、由緒のある神を拜ほむのではない。この島の火山には鎮護ちんごの為か、岩殿と云う祠ほこらがある。その岩殿へ詣もつでるのじゃ。——火山と云えば思い出したが、お前はまだ火山を見た事はあるまい？」

「はい、唯さつき榕樹の梢に、薄赤い煙のたなびいた、禿^はげ山の姿を眺めただけです」

「では明日^{あす}でもおれと一しよに、頂へ登って見るが好い。頂へ行けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるようじや。岩殿の祠も途中にある、——その岩殿へ詣でるのに、康頼はおれにも行けと云うたが、おれは容易には行こうとは云わぬ」

「都では僧都の御房一人、そう云う神詣でもなさらぬ為に、御残されになったと申して居ります」

「いや、それはそうかも知れぬ」

俊寛様は真面目まじめそうに、ちよいと御首を御振りになりました。

「もし岩殿に霊があれば、俊寛一人を残したまま、二人の都返りを取り持つ位は、何とも思わぬ禍津神まがつがみじゃ。お前はさつきおれが教えた、少将の女房を覚えているか？

あの女もやはり岩殿へ、少将がこの島を去らぬように、毎日毎夜詣でたものじゃ。ところがその願は少しも通らぬ。すると岩殿と云う神は、天魔にも増した横道者じゃ。天魔には世尊御出世の時から、諸悪を行うと云う戒行かいぎようがある。もし岩殿の神の代りに、天魔があつた祠にいと

すれば、少将は都へ歸る途中、船から落ちるか、熱病に
 なるか、とにかくに死んだのに相違ない。これが少将も
 あの女も、同時に破滅させる唯一の途^{みち}じや。が、岩殿は
 人間のようにな、諸善ばかりも行わねば、諸悪ばかりも行
 わぬらしい。尤もこれは岩殿には限らぬ。奥州^{なとりのこおり}名取郡
 笠島^{かさじま}の道祖^{さえ}は、都の加茂河原^{かもがわら}の西、一条の北の辺^{ほとり}に住
 ませられる、出雲路^{いづもじ}の道祖の御娘^{おんむすめ}じや。が、この神は
 父の神が、まだ聳^{むこ}の神も探されぬ内に、若い都の商^{あきゆうど}人
 と妹背^{いもせ}の契^{ちぎり}を結んだ上、さっさと奥へ落ちて来られた。
 こうなつては凡夫も同じではないか？　あの実方^{さねかた}の中將

は、この神の前を通られる時、下馬も拜もされなかつた
 ばかりに、とうとう蹴殺けころされておしまいなすつた。こう
 云う人間に近い神は、五塵ごじんを離れていぬのじやから、何
 を仕出かすか油断はならぬ。このためしでもわかる通り、
 一体神と云うものは、人間離れをせぬ限り、崇あがめると云
 えた義理ではない。——が、そんな事は話の枝葉じや。
 康頼と少将とは一心に、岩殿詣でを続け出した。それも
 岩殿を熊野になぞらえ、あの浦は和歌浦、この坂は蕪坂かぶらざか
 なぞと、一一名をつけてやるのじやから、まず童わらべたち
 が鹿狩しかがりと云つては、小犬を追いまわすのも同じ事じや。

唯音無おとなしの滝たきだけは本物よりもずっと大きかった」

「それでも都の噂では、奇瑞きずいがあつたとか申しています
が」

「その奇瑞の一つはこうじや。結願けちがんの当日岩殿の前に、

二人が法施ほっせを手向てむけていると、山風が木木あおを煽あおった拍子

に、椿つばきの葉が二枚こぼれて来た。その椿の葉には二枚

とも、虫の食った跡が残っている。それが一つには帰雁きがん

とあり、一つには二とあつたそうじや。合せて読めば帰

雁二となる、——こんな事が嬉しいのか、康頼は翌日得

得と、おれにもその葉を見せなぞした。成程二とは読め

ぬでもない。が、帰雁は如何にも無理じゃ。おれは余り可笑おかしかつたから、次の日山へ行った歸りに、椿の葉を何枚も拾って来てやった。その葉の虫食いを続けて読めば、帰雁二どころの騒さわぎではない。『明日みょうにち歸洛』と云うのもある。『清盛横死きよもりおうし』と云うのもある。『康頼往生やすよりおうじょう』と云うのもある。おれはさぞかし康頼も、喜ぶじやろうと思うたが、——」

「それは御立腹おこなすつたでしょう」

「康頼は怒おこるのに妙を得ている。舞も洛中に並びないが、腹を立てるのは一段と巧者じゃ。あの男は謀叛なぞ

に加わったのも、しん嗔恚いに牽ひかれたのに相違ちがない。その嗔恚しんいの源みなもとはと云えば、やはり増長慢ぞうじょうまんのなせる業わざじゃ。平家は高平太たかへいだ以下皆悪人、こちらは大納言以下皆善人、——康頼はこう思おもうている。そのうぬ惚おぼれが為ためにならぬ。又さつきも云いうた通り、我我凡夫は誰も彼も、皆高平太と同様なのじゃ。が、康頼の腹はらを立てるのが好すいか、少将のため息いきをするのが好すいか、どちらが好すいかはおれにもわからぬ」

「成経様御一人だけは、御妻子もあつたそうですから、御紛まれになる事こともありましたらうに」

「ところが始終蒼い顔あおをしては、つまらぬ愚痴ばかりこぼしていた。たとえば谷間の椿を見ると、この島には桜も咲かないと云う。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云う。何でも其処にある物は云わずに、ない物だけ並べ立てているのじゃ。一度なぞはおれと一しよに、磯山へ橐吾つわぶを摘みに行ったら、ああ、わたしはどうすれば好いのか、此処には加茂川の流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかつたのは、我立つそま杣の地主じしゅごんげん権現、日吉の御冥護みょうごに違いない。が、おれは莫迦ばか莫迦かしかつたから、此処には福原の獄ひとやもない、平相国へいしようこく

入道浄海もいない、難有ありがたい難有いとこう云うた」

「そんな事を仰有つては、いくら少将でも御腹立ちになりましたろう」

「いや、怒られれば本望じや。が、少将はおれの顔を見ると、悲しそうに首を振りながら、あなたには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方ですと云うた。ああ云う返答は、怒られるよりも難儀じや。おれは、——
実はおれもその時だけは、妙に気が沈んでしもうた。もし少将の云うように、何もわからぬおれじやったら、気も沈まずにすんだかも知れぬ。しかしおれにはわかって

いるのじゃ。おれも一時は少将のように、眼の中の涙を誇ったことがある。その涙に透かして見れば、あの死んだ女房も、どのくらい美しい女に見えたか、——おれはそんな事を考えると、急に少将が気の毒になった。が、気の毒になって見ても、可笑しいものは可笑しいではないか？　そこでおれは笑いながら、言葉だけは真面目に慰めようとした。おれが少将に怒られたのは、跡にも先にもあの時だけじゃ。少将はおれが慰めてやると、急に恐しい顔をしながら、嘘うそをおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑われる方が本望ですと云うた。

その途端に、——妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしまった」

「少将はどうなさいました？」

「四五日の間はおれに遇うても、挨拶あいさつさえ碌ろくにしなかつた。が、その後のち又遇うたら、悲しそうに首を振っては、

ああ、都へ返りたい、此処には牛車ぎっしゃも通らないと云うた。

あの男こそおれより仕合せものじゃ。——が、少将や康頼でも、やはり居らぬよりは、いた方が好い。二人に都へ歸られた当座、おれは又二年ぶりに、毎日寂しゅうてならなかった」

「都の噂では御寂しいどころか、御歎き死にもなさり兼ねない、御容子ようすだったとか申していました」

わたしは出来るだけ細細こまごまと、その御噂を御話しました。琵琶法師の語る言葉を借りれば、「天に仰ぎ地に俯ふし、悲しみ給へどかひぞなき。……猶なおも船の纜ともづなに取りつき、腰になり脇になり、丈たけの及ぶ程は、引かれておはしけるが、丈も及ばぬ程にもなりしかば、又空むなしき渚なぎさに泳ぎ返り、……是具これして行けや、我乗せて行けやとて、おめき叫び給へども、漕こぎ行く船のならひにて、跡は白浪しらなみばかりなり」と云う、御狂乱の一段を御話したのです。俊

寛様は御珍しそうに、その話を聞いていらっしやいましてが、まだ船の見える間は、手招ぎをなすっていらしつたと云う、今では名高い御話をすると、

「それは満更嘘ではない。何度もおれは手招ぎをした」と、素直に御領うなずきなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦まつらの佐用姫さよひめのように、御別れを御惜しみなすったのですか？」

「二年の間同じ島に、話し合ってた友だちと別れるのじゃ。別れを惜しむのは当然ではないか？　しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではない。――」

体あの時おれの所へ、船のはいつたのを知らせたのは、この島にいる琉球人じや。それが浜べから飛んで来ると、息も切れ切れに船船と云う。船はまずわかったものの、何の船がはいつて来たのか、その外の言葉はさっぱりわからぬ。あれはあの男もうろたえた余り、日本語と琉球語とを交る^{かわ}交る^{がわ}、饒舌^{しゃべ}っていたのに違いあるまい。おれはともかくも船と云うから、早速浜べへ出かけて見た。すると浜べには何時^{いつ}の間にか、土人が大勢集っている。その上に高い帆柱^{ほばしら}のあるのが、云うまでもない迎いの船じや。おれもその船を見た時には、さすがに心が躍^{おど}る

ような気がした。少将や康頼はおれより先に、もう船の側へ駈かけつけていたが、この喜びようも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒蛇どくじやに噛かまれた揚句、気が狂ったのかと思うた位じや。その内に六波羅ろくはらから使に立った、丹左衛門尉たんのさ えもん の じょうもと やす基安は、少将に赦免の教書を渡した。が、少将の読むのを聞けば、おれの名前がはいっていない。おれだけは赦免にならぬのじや。——そう思ったおれの心の中うちには、僅わずか一弾指いちだんしの間あいだじやが、いろいろの事が浮んで来た。姫や若の顔、女房ののしの罵る声、京極の屋形の庭の景色、天竺てんじくの早利そうり即利そくり兄弟、震旦しんたんの一いち

行阿闍梨ぎょうあじやり、本朝の実方の朝臣あそん、——とても一一数えてはいられぬ。唯今でも可笑しいのは、その中にふと車を引いた、赤牛の尻が見えた事じや。しかしおれは一心に、騒がぬ容子をつくっていた。勿論もちろん少将や康頼は、気の毒そうにおれを慰めたり、俊寛も一しよに乗せてくれいと、使にも頼んだりしていたようじや。が、赦免の下らぬものは、何をどうしても、船へは乗れぬ。おれは不動心を振り起しながら、何故おれ一人赦免に洩もれたか、その訳をいろいろ考えて見た。高平太はおれを憎んでいる。——それも確かには違いない。しかし高平太は憎むばかり

りか、内心おれを恐れている。おれは前の法勝寺ほっしょうじの執行しゅぎやう
 じや。兵仗へいじやうの道は知る筈はずがない。が、天下は思いの外、
 おれの議論に応ずるかも知れぬ。——高平太は其処を恐
 れているのじや。おれはこう考えたら、苦笑せずにはい
 られなかつた。山門や源氏の侍どもに、都合の好い議論
 を拵こしらえるのは、西光法師さいこうなどの嵌はまり役じや。おれは眇びよう
 たる一平家に、心を勞おいする程老耄ぼはせぬ。さつきもお
 前に云うた通り、天下は誰でも取っているが好い。おれ
 は一卷の経文の外に、鶴の前でもいれば安堵あんどしている。
 しかし浄海入道になると、浅学短才の悲しさに、俊寛も

無気味に思っているのじゃ。して見れば首でも刎ねられる代りに、この島に一人残されるのは、まだ仕合せの内かも知れぬ。——そんな事を思っている間に、愈いよいよ船出と云う時になった。すると少将の妻になった女が、あの赤児を抱いだいたまま、どうかその船に乗せてくれいと云う。おれは気の毒に思つたから、女は咎とがめるにも及ぶまいと、使の基安に頼んでやった。が、基安は取り合ひもせぬ。あの男は勿論役目の外は、何一つ知らぬ木偶でくの坊じゃ。おれもあの男は咎めずとも好い。ただ罪の深いのは少将じゃ。——」

俊寛様は御腹立たしそうに、ばたばた芭蕉扇を御使いなさいました。

「あの女は氣違ひのように、何でも船へ乗ろうとする。舟子ふなごたちはそれを乗せまいとする。とうとうしまいにあの女は、少将の直垂ひたたれの裾すそを掴つかんだ。すると少将は蒼い顔をしたまま、邪慳じゃけんにその手を刎はねのけたではないか？ 女は浜べに倒れたが、それぎり二度と乗ろうともせぬ。唯おいおい泣くばかりじゃ。おれはあの一瞬間、康頼にも負けぬ大嗔しんい恚いを起した。少将は人畜生じんちくしょうじゃ。康頼もそれを見ているのは、仏弟子の所業とも思われぬ。おま

けにあの女を乗せる事は、おれの外に誰も頼まなかつた。

——おれはそう思うたら、今でも不思議な気がする位、

ありとあらゆる罵詈ばりざんぼう讒謗が、口を衝ついて溢あふれて来た。尤

もおれの使ったのは、京童の云う悪口あっこうではない。八万法

蔵十二部経中の悪鬼羅刹あつきらせつの名前ばかり、矢つぎ早に浴び

せたのじゃ。が、船は見る見る遠ざかってしまふ。あの

女はやはり泣き伏したままじゃ。おれは浜べにじだんだ

を踏みながら、返せ返せと手招ぎをした」

御主人の御腹立ちにも関かかわらず、わたしは御話を伺っ

ている内に、自然とほほ笑んでしまいました。すると御

主人も御笑いになりながら、

「その手招ぎが伝わっているのじや。嗔恚たの祟たりは其処にもある。あの時おれが怒りさえせねば、俊寛は都へ歸りたさに、狂いまわったなぞと云う事も、口の端はへ上らずにすんだかも知れぬ」と、仕方がなさそうに仰有るのです。

「しかしその後のちは格別に、御歎なきなさる事はなかつたのですか？」

「歎いても仕方はないではないか？ その上時のたつ内には、寂しさも次第に消えて行つた。おれは今では己こ身しん

の中うちに、本仏を見るより望みはない。自土即浄土と観じ
 さえすれば、大歡喜だいかんぎの笑い声も、火山から炎の迸ほとばしるよ
 うに、自然と湧いて来なければならぬ。おれは何処まで
 も自力じりきの信者じゃ。——おお、まだ一つ忘れていた。あ
 の女は泣き伏したぎり、何時までたつても動うごこうとせぬ。
 その内に土人も散じてしまふ。船は青空に紛れるばかり
 じゃ。おれは余りのいじらしさに、慰めてやりたいと思
 うたから、そつと後手うしろに抱き起たそうとした。するとあ
 の女はどうしたと思う？　いきなりおれをはり倒したの
 じゃ。おれは目が眩くららみながら、仰向けに其処へ倒れて

しもうた。おれの肉身に宿らせ給う、諸仏諸菩薩諸明王も、あれには驚かれたに相違ない。しかしやっとなり起き上って見ると、あの女はもう村の方へ、すごすご歩いて行く所じやった。何、おれをはり倒した訳か？ それはあの女に聞いたが好い。が、事によると人気がなし、凌りようぜられるとでも思ったかも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りまし

た。それから一月程御側にいた後、御名残り惜しい思いをしながら、もう一度都へ帰って来ました。「見せばやなわれを思はむ友もがな磯のとまやの柴しばの庵いほりを」——これが御形見に頂いた歌です。俊寛様はやはり今でも、あの離れ島の笹ささ葺ぶきの家に、相不あいか変わ御一人悠悠と、御暮らしになっている事でしょう。事によると今夜あたりは、琉球芋を召し上りながら、御仏の事や天下の事を御考えに
 になっているかも知れません。そう云う御話はこの外にも、まだいろいろ伺ってあるのですが、それは又何時か申し上げましょう。

日本文学電子図書館

羅生門・鼻

著者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和43年7月20日発行



日本文学電子図書館